NEZASHI - ００１

清掃の頻度、どこまでやりますか？

Medley Works.
Since 2017
Work in any weather.

まとめ（なぜやるか）

・品質維持：異物混入を防ぐため
・設備保全：故障や摩耗を防ぐため
・安全確保：火災や事故のリスクを下げるため

この資料でわかること

・清掃の頻度や範囲は、一律ではなく、
　原料・設備・工程・環境・稼働条件によって変わる

・一方で、「朝一で必ず触る」「終業前に短時間でも清掃する」など、
　共通して見られる考え方もある

・清掃は単なる片付けではなく、品質維持・設備保全・安全確保に
　つながる判断の一部である

基本情報

・テーマ：清掃の頻度と範囲
・比較対象：日常清掃・中間清掃・大掃除の考え方
・対象範囲：紡績・織布・編立・染色など、工程特性の異なる現場
・情報収集方法：現場ヒアリング、運営による整理、既存の実務資料の再構成
・注意：本資料は正解を示すものではなく、条件ごとの判断を比較するための記録です

用語定義

・日常清掃
毎日行う清掃。

始業前・終業前などに、機械周辺や見える範囲を整える。

・中間清掃
週次、または必要時に行う清掃。
床、通路、機械裏、フィルター、ダクトなど、日常清掃では手が回りにくい箇所を対象とする。

・大掃除
連休前や停止期間前後などに行う清掃。
梁、配管、高所、風綿のたまりやすい箇所、普段触らない部分まで含めて対応する。

共通点

・清掃は「品質管理の一部」として捉えられている
・毎日まったく何もしない現場は少なく、「短時間でも継続する」考え方が多い
・汚れをためてからまとめて対応するより、「気づいた時点で取る」方が負担が少ない
・目的は「見た目」より、「異物混入防止・設備保全・安全確保」に置かれている

相違点

・毎日どこまでやるか
・機械内部まで日常的に触るか
・週次清掃を固定するか、必要時対応にするか
・連休前や切替時にどこまで徹底するか
・清掃の担当を個人単位にするか、班・工程単位で持つか

現場でよく見られた判断

日常清掃
・始業前に機械周辺を確認する
・終業前に10分程度の清掃時間を設ける
・ドロッパ、ストップモーション周辺、手元で触れる範囲は毎日見る
・汚れを見つけたら、その場で取る

中間清掃
（頻度が分かれやすい条件）
・綿ぼこりや糸くずの発生量
・密閉度
・自動清掃機能の有無
・通気や気流の強さ
・品種切替の頻度
・油を使う工程かどうか

大掃除
（対象になりやすい箇所）
・梁
・配管
・高所
・風綿のたまりやすい箇所
・普段の清掃対象から外れている部分

工程ごとに違いが出やすいポイント

・紡績：綿ぼこりの発生量が多く、日常的な清掃頻度が高くなりやすい
・織布：機械周辺の清掃に加え、風綿対策が重要になりやすい
・染色：色替えの影響があるため、機械内部の洗浄が重視されやすい
・編立：糸くずに加えて油の管理も必要になり、清掃対象が広がりやすい

現場で行われている“ならわし”

・朝一は必ず触る
・終業前の10分は清掃に充てる
・連休前は普段以上に徹底する
・汚れたらその場で取る
・風綿が見え始めたら早めに動く
・最近トラブルが増えてきたら、まず清掃状態を見直す
・品種切替の前後は、いつもより丁寧に見る

なぜ判断が分かれるのか

清掃頻度や範囲の違いは、単なる意識の差ではなく、現場条件の違いから生まれています。

・原料の違い：綿ぼこりや異物の発生量が変わる
・設備の違い：密閉度、自動清掃の有無、旧式機かどうかで確認箇所が変わる
・環境の違い：湿度、気流、季節変動で滞留しやすさが変わる
・工程の違い：工程ごとに重視すべき清掃ポイントが異なる
・稼働条件の違い：稼働時間や品種切替頻度によって判断が変わる

活用の視点

現場で
・自社の清掃頻度が妥当か見直す
・トラブル増加時に、清掃の抜けを確認する
・新人教育で「なぜ清掃するのか」を説明する

教育機関で
・工程別に清掃の考え方がなぜ違うのかを学ぶ
・品質管理・設備保全・安全管理のつながりを教える
・「作業」ではなく「判断」として清掃を見る

行政・支援機関で
・地域事業者支援の参考資料にする
・現場改善の初期ヒアリング項目を考える
・共通課題の整理や研修資料のたたき台にする

判断のヒント

□最近、異物混入や小さなトラブルが増えていないか
□汚れや風綿のたまり方が早くなっていないか
□湿度・気流・季節変化による影響が出ていないか
□品種切替や色替えの前後で、見落としが起きやすくなっていないか
□清掃が後回しになり、日常清掃だけで追いつかなくなっていないか
□現在の清掃範囲は、設備や工程の特性に合っているか
□担当の持ち方が曖昧で、抜けが出やすくなっていないか

判断のために

清掃の頻度や範囲は、一律に決められるものではありません。
重要なのは、「毎日やるかどうか」だけではなく、「どの条件で、どこまで、何のために行うか」を見極めることです。

本データは、複数の判断や考え方を前提条件ごとに整理したものです。
条件が異なれば、最適な選択も変わります。
あなたの現場では、どの判断が近いでしょうか。